

『正直ジョンと一途なケイト』の家政学

——初期近代イングランドの「純愛」物語——

佐藤和哉

1. はじめに

1960年代から70年代にかけて、歴史研究者が民衆文化史研究に手を染め始めた時期に、まずは、民衆文化とエリート文化の分離や対立を問題としたことの意義は充分評価されてしかるべきである。しかし、その後の研究の展開のなかで、初期近代イングランドの民衆文化はエリート文化と峻別されうるものではなく、たがいに影響しあったり干渉しあったりした関係性のなかでそれを捉えるべきだという主張が、次の世代の研究者のあいだで一応のコンセンサスを得るようになった(Harris, Reay)。また「民衆文化」とは言え、それが必ずしも「民衆」だけのものではなく、文化の区分が横断的な社会階層による区分とは必ずしも対応しない、つまり初期近代にいたっても地主や社会的エリートもある程度は民衆文化に関わった、という点に関しても、すでに一定の合意があるとしてよい(ただし、いわゆる「民衆」はエリート文化には参加しない、とされている)。

初期近代イングランドに行商人などによって相当程度の流通を見せていた「物語集^{ヒストリーズ}」とは、19世紀の古書蒐集家や尚古家によって「チャップブック」と呼ばれるようになる一群の小冊子を指す当時の用語であるが、これらはブロードサイド・バラッドなどと並んで、今述べたような意味での「民衆文化」に属していた。一方、これらの冊子群は、その圧倒的大多数について作者が分からない。『ロビンソン・クルーソー』などの作者が存在する小説のダイジェスト版であっても、その簡約化の作業はだれが行ったのか

はほとんどの場合不明である。したがって、「作者」はそもそも問題とならず、当然、その「意図」を問うこともできない。そこで、「物語集」というジャンルに通常見られる「ジャンルとしての慣習」や特徴的な言葉遣いなどに注目しながら読み解いていくのが、これらの冊子群を読むうえでの一つの有効な方法だろう。また、受容者について考える場合も、テキスト内部に手がかりを求める、すなわち、そのテキストが受容者に要求する文化的リテラシーや登場する文物への知識など、それがないと読んだり聞いたりしてもその作品が楽しめないような情報があるかどうかを考えるのがアプローチとして正しい。たとえば、ギリシア・ローマ神話の世界を再話した物語がもとの神話についての知識を前提としているとき、受容者にはごく初歩的であっても必要最小限の古典的教養が求められていると言える、というような場合がその端的な例である。このような読みかたにもとづく近年の研究によって、「物語集」の受容者層は必ずしも階級を横断するものではなく、従来考えられていたよりも多岐にわたる社会階層にまたがるものであることも明らかになってきた(Reay 55)。また、その〈読者＝オーディエンス聴衆〉は「子ども」に限定されるものではないが、もしも、「物語集」のタイトルページに頻出する「才気に富むすべての若い男性、女性たちのために」(*Canterbury Tales* title page)というような表現をその通り受け止めてよいのだとすれば(この仮定は確実なものではないが、現時点では「受け止めてはならない」とするだけの理由が見つからない)、今で言うティーン・エイジャーに相当するような年齢層までを読者として想定してよいのではないかと思われる¹。

以上の議論を前提とすれば、その個々の作品を詳細に読み解くことで、いわゆる民衆を含む比較的広い社会階層(おそらくはそのなかの若年層)にわたる〈読者＝オーディエンス聴衆〉が娯楽として接していたものについて何らかの手がかりが得られると考えるのはそれほど的外れではないだろう。なお、この種の議論で常に問題となる識字率については、たとえば18世紀中ごろで、男性が60%、女性が40%くらいとするのが、大方の一致した意見のよう

であるが (Brewer 167, Speck 11)、民衆文芸の場合には、「読み聞かせ」による伝播を考えなければならないので、議論の対象となっているテキストの内容に触れることのできた人びとの割合は必ずしもこの数字に縛られない。また、これらのテキストの受容者を単に「読者」とせずに、「^{オーディエンス}読者=聴衆」と表記するのもその故である。

なお、「フィクション」である「物語集」を史料として歴史的な考察をすることに関しては、文学作品の史料的価値について政治史学者の W・A・スベックが述べた、「文学はその時代に支配的なイデオロギーを反映するとともにそれを形成もする」(Speck 3-4) という言葉が参考になる。「その時代に支配的」であるかどうかは別にしても、想定される当時の読者が抱いていた世界観や価値観とのあいだに「^{ヒストリーズ}物語集」が何らかの相互作用を持っていたのではないか、というのは充分有効な作業仮説であろう。

本稿では、以上の点をふまえたうえで、『正直なジョンと一途なケイトの対話』という一編の「^{ヒストリー}物語」を取り上げて検討する。ここで議論の焦点となるのは、そこに提出されている婚姻や結婚生活に関する価値観と、その表象のありかたである。「^{ヒストリーズ}物語集」のなかでも、メロドラマ的要素の強いもの(例えば『ジェイン・ショア』や『美しいロザモンド』など)は、王との不倫など「結婚」という制度からの逸脱がもたらす悲劇を描くことが多いし、バーレスクやスラップスティック(例えば『不埒なトム』や『トム・トラム』)は、婚姻の約束を餌にして若い娘を食い物にして逃げる主人公を描いて、結婚という制度そのものを笑いの対象とするのがもっぱらである(佐藤和哉「ベニー本」)。それに対して、この『ジョンとケイト』という「^{ヒストリー}物語」は、結婚の約束を交わした徒弟と家事奉公人のカップルが結婚の準備について話し合い、結婚式を迎えるまでの様子を描いたものである。一読すると、この物語は「^{オーディエンス}読者=聴衆」の多数を構成していたと思われる、若年層の民衆が結婚に対して抱く夢や希望を描いたものであるとして読めるし、その読みかたも当然ありうるだろう。しかし、この物語は、このカップルが交わす会話を「素朴で可笑しい」あるいは「微笑ましい」とい

う視点から描いていて、そのように感じることで読者、すなわち、レトリックを操る力や文化的リテラシーにおいて登場人物よりも優位にある読者を対象としていることも読みとれる。そうだとすると、この物語には、若年層の民衆が結婚に対して抱いていたイメージを読みとることができるだけでなく、「素朴な民衆」の性や結婚のありかたを肯定的に提示しようとする、文化的優位者の策略をも読むことができるのではないだろうか。本稿は、初期近代イングランドの民衆がアクセスすることが可能だったはずのテキストのなかに見られる恋愛や結婚についての想いを探るとともに、そういう想いを是とするような「上からの視点」の意味を問おうとする試みである。

2. テキストについて——書誌的情報と物語の性格——

この物語は二部で構成されていて、『正直ジョンと一途なケイトの間に交わされた、心地よく楽しい対話。結婚式と生計の立てかたをどう工夫するか。第一部』と『正直ジョンと一途なケイトとの間のすばらしい対話、第二部。求婚の話だけでなく、結婚式の場面も含む』とからなっている(以下、『ジョンとケイト』第一部、第二部とし、註では Part 1, Part 2 とする)。本稿では、オクスフォード大学ボードリアン図書館のハーディング・コレクションにある史料を検討の対象とする (Harding A. 56 (32), (33))。ハーディングが集めたこの合本において、第一部はジョン・ホッジズ、第二部はエドワード・ミッドウインタによって印刷・出版されている。ホッジズの名前は 1730 年代前半から 50 年代半ばにかけての出版物、例えば『ロビンソン・クルーソー』の縮約版などのインプリントに見ることができる (Sato 219–220)。また、ミッドウインタについては、1710 年代初頭から 20 年代の半ばにかけて活動していた印刷出版業者であることが分かっている (佐藤和哉「18 世紀ロンドン」19–21)。このように、今回検討する史料は、二冊がそれぞれ別々の印刷出版業者によって十年からそれ以上のあいだをおいて出版されたものであるが、話がきちんとつながるところから考

えると、あまり多くのヴァリエント(異本)は存在していなかったものと推測される。

今回使用するもの以外の版について見てみると、1998 年発行の CD-ROM 版『英文簡略表題カタログ: 1473 年～1800 年』には、1685 年にロンドンで出版された同名の冊子の記載がある (British Library)。また、スパフォードが研究の対象とした、サミュエル・ピープスが集めた冊子集に収められているのもこの版である (Spufford 264)。タイトルページに記載されている「読者のみなさまへ」と称する内容紹介の短い韻文が、カタログの記載に記されているが、これが、本稿で検討するホッジズの版に記されているものと同じである点に注目したい(ここにいるのは、すてきなカップル / もうすぐ結婚する予定 / 正直ジョンと一途なケイト / たがいに似合いのお相手だ / 幸せあれと願います / 心はたがいのものだから (Part 1, Title page))。そうだとすれば、この 1685 年版がここで検討する版と大きく内容が異なるとは考えられない。つまり、ほぼ同じ内容のテキストが少なくとも 50 年(ホッジズ版は年代が特定できないが、上記のような年代の範囲内で活動していたことから推測される)以上、伝わっていたことが分かるのである。

このように、遅くとも 17 世紀後半にはこの物語が存在していたことが確認されるが、18 世紀ロンドンにおいて「物語集」の出版業者として最大規模を誇っていたダイシー一家の在庫カタログにも、確認できただけでも二箇所、同名の冊子の記載がある。一つは現存する 1754 年のカタログであり (Dicey 41–44)、もう一つはウェブ上に公開されている 1764 年に発行されたカタログである (Simmons)。そのほか、ウェブ上のカタログの編纂者のシモンズによると、ダービー、グロースター、レスター、リンカーン、マンチェスター、ニューカッスル、プレストン、ウルヴァーハンプトン、ウースターなどで出版されていたものが残っているということである。さらに、大英図書館のオンライン・カタログには、1830 年ごろにバンベリーで発行されたもの (HMNTS 1078.i.26.(6.)) が記載されているので

(<http://catalogue.bl.uk/>)、『ジョンとケイト』は17世紀後半から19世紀初頭まで、おそらくはあまり大きく形を変えずに存在していたことが推測される。これらの出版状況からすると、『ジョンとケイト』は、どれほど読まれたのかを正確に知ることはできないにしても、ことさらに読まれることの少ない「物語」^{ヒストリー}だったとは考えにくい。人気のない作品であれば、これほど長いあいだ再版されたりほかの都市で作り直されたりすることは(純粋に資本主義的な理由から)なかったからである。したがって、これから先の議論は、『ジョンとケイト』が一定の読者を持った「物語」^{ヒストリー}であったことを前提として進めていくことにする。

内容を検討するまえに、物語の全体を眺めておこう。『ジョンとケイト』は、まず第一に恋愛物語である。またその恋愛は、「物語集」^{ヒストリーズ}によく見られる種類の、遠い過去の物語でもなければ、異国が舞台となるものでもない。おそらくは想定される〈読者＝聴衆〉^{オーディエンス}の大部分と同じような社会階層の徒弟と家事奉公人がたがいに愛し合って結婚する物語である。とくに第一部のかなりの部分は、二人が交わし合う睦言や、たがいに歌って聞かせる相聞歌にあてられている。なお、台詞のような形式で書かれているテキストのありかたや、歌が登場するところからすると、この冊子が何らかの上演を前提としていた可能性も否定できないが、逆にこの題目が演じられた記録もないので、この点については今後の研究を待つしかない。行論の必要上、ごく簡単に物語の全体を見ておこう。

物語は、休日に酒場で二人が結婚の相談をする対話の形で進む。そろそろ結婚しようというジョンに対して、ケイトは、どうやって暮らしていくかをよく考えてからでないと返事ができないと言う。そこで二人は自分たちの貯金や、それぞれの雇用先に預けてある給金などを確認し、さらにジョンは結婚に際して親方からもらえることになっている家のことを話して、その家で居酒屋を経営しようと提案する。それから、結婚式の日時や場所、招待客、パーティによぶ余興やドレスなど式にまつわる細々としたことなどについても話し合う。そろそろ帰らなければ女主人に叱られると

いうケイトに、別れを惜しむジョンは自作の詩を語って聞かせ、思いのたけを打ち明ける。二人は、それぞれの主人に結婚のことを話すことを決めて、別れる(以上、第一部)。

第二部では、翌日再びジョンとケイトが会って、その後の話をする。まずジョンが親方の反応について話す。ジョンが親方に結婚の話をする、結婚そのものには賛成し、大いに祝福してくれたが、結婚してから二人で店をやっていくのには反対する。素人がいきなり始めてうまくいくものではないというのだ。そのかわりに自分が持っている小さな農場をくれて、家畜を飼う金も貸してやるという。親方夫妻はさらに、祝宴の費用も申し出てくれた。ここでもケイトは、どのようにして農場の切り盛りをやっていくつもりかをジョンに尋ね、ジョンは新生活についてのヴィジョンを細かく語る。このような話を、恋人としての睦言とともに語り合い、結婚の日取りを決めた二人は帰途につき、ジョンはケイトを送っていきがてらケイトの女主人に結婚の報告をする。女主人も心から喜び二人を祝福してくれた。こうして最後は華やかな結婚式の場面で終わる。

このような内容の要約からは抜け落ちてしまうが、このテキストで重要なポイントは、二人の会話を「どのように」提示しようとしているかである。次のような会話から何を読みとれるか。

ジョン: [...]おれが自分で作った唄を聞かせてやるよ。

ケイト: あんたが詩人だなんて知らなかったわ。じゃあ、早く聞かせてよ。

ジョン: 恋していると雄弁になるものさ。おまえに会うまでは、そんな知恵なんざ持ってたことがなかったんだぜ。おれの知恵はおまえがおれにくれたようなもんさ。

ケイト: そうかもね。あんたと会ってから、とんと知恵が回らなくなっさ。どこに行ったのかと思ってたところだよ。

[...]

ジョン: [唄を歌う]ピュリスの恋人 コリュドーン

ピュリスの恋人 コリュドーン

ケイトの彼は愛しいジョン
言ってることがほんとなら
[...]

ケイト: [...] あんたが、こんなに学者だなんてちっとも思わなかった。どのくらい学校に行ってたの。

ジョン: それほど長いことじゃねえ。畑仕事が気になったし、親父の馬の世話もせにゃならなかったしよ。勉強よりそっちのほうが大事だったんだよ。それでも、十四になるころにゃ、礼拝の歌はうまく読めたんだぜ。[...]。(Part 1, 17-18)

歌の大半を略したが、最初の四行だけであとは推して知るべしの出来である。原文では、“Phillis love her Corry’don,” となっていて、文法的に三単現の“s”を落とすなど、韻文としてはいかにも稚拙だと言える。「稚拙」という表現が無用な価値評価を含むとすれば、文体の点でも技巧の点でもたいへん単純だ、と言いかえてもよい。こういう詩を作るジョンを「詩人」だ「学者」というケイト。一方、ピュリスやコリュドーンの名前は、ヴェルギリウスの『牧歌集』など古典文芸の世界の典型的な田舎娘や羊飼いのことである。先にも簡単に触れたが、本来、民衆文化とされる古典世界への言及が「物語集」のなかに散見されることは珍しくない。古典的教養を聞きかじり程度に持つ徒弟が、限られた言語処理能力のなかで一生懸命に恋人に自分の想いをアピールしようとするようすと、それに素直に感動してしまい、相手の知識を過大評価してしまう家事奉公人の娘の素朴さを「滑稽」なものとして、このテキストは表している。それは、二人と同じ高さの視線でかれらを見るのではなく、明らかに「上」（それを階級的の垂直関係と見るか、文化的リテラシーの点での達成度による上下と見るかは別にして）から見下ろす視線だと言えるだろう。一見すると、素朴な恋愛、求婚と結婚を描いている民衆の物語であるように思われる『ジョンとケイト』には、その「語りかた」において、このような複雑さが含まれていることを確認しておこう。

以上のような準備のもとに、以下では、『ジョンとケイト』の内容について

て、17 世紀後半から 18 世紀中葉にかけてのそのほかのテキストと照らし合わせながら、検討していくことにする。テキストの検討を通じて、この物語がどのような価値意識を体現しているかを明らかにしたい。以下では、恋愛や性に関する価値意識と、経済活動としての結婚生活に関する価値意識を取り上げることにする。

3. 内容の検討 (1)——恋愛と性愛——

さて、「第一部」は二人の痴話げんかから始まる。休日に二人が会って話を始めるが、ジョンはケイトが口数が少ないのに気づく。理由を尋ねると、ジョンがほかの女に求婚したという噂がたっているからだと言う。ジョンは、確かにそのベグという女(おそらくは別の家の家事奉公人)といっしょにエールを飲んだことはあるが、それだけだと答える。また、別の未亡人も、ジョンが自分と結婚するつもりだと触れ回っている、とケイトが訴えるのに対し、ジョンは、友人のサマーズといっしょにベーコンとハムをごちそうになりに行っただけで、ほかには何も無い、と言ってケイトを安心させ、二人は仲直りをする。

このようなジョンの行動、とくに若い複数の男性が未亡人の家に遊びに行って酒食の饗応を受けるという交際のありかたは、ティム・ヒッチコックが紹介している、初期近代イングランドにおける若い未婚男性の行動パターンと合致する (Hitchcock 29–30)。ヒッチコックは、1684 年生まれの徴税吏ジョン・キャノンの青年時代の行動について、「[...]キャノンは、本質的に『遊び』であるような性的活動に参加していたが、そういう活動は、人口増加が停滞していた 1650 年から 1750 年ごろの、比較的貧しい階層や中流階層のほとんどの人びとの生活の一部だったと言える」と述べている (31)。ヒッチコックによれば、こういう「遊び」あるいは「擬似的な恋愛」は、同年代の友人とともに行われることが多く、必ずしも真剣な恋愛行動に発展するものではなかったということである。物語のジョンも、軽い気持ちで友人とともにその未亡人のところに出かけていったに違

いないだろう。

しかし、キャンノンの青年時代の性的行動に比べると、物語のジョンの行動はずっと強い道徳観念に制御されている。キャンノンは独身時代(結婚したのは30歳のとき)に、四人の女性と婚姻の約束をしたり、性的な関係を結んだりしている。一方、物語のジョンは、婚約をしていて結婚の約束までしているケイトに対しても、キス以上のことはしていない。「第二部」の場面は人気のない林であるが、そこでケイトが、昔聞いたことがあるという、男にもて遊ばれて捨てられた女のことを話題にしたとき、

ジョン: そいつはひどい奴だなあ。でも、そんな奴にはきっと罰が当たるぜ。おれはそんな悪さは絶対しねえ。おれの値打ちにあたるだけの金全部にかけたって。

ケイト: あんたの言うことを信じるわよ、ジョン。もしもあんたのことを正直者だって思ってなかったら、こんなに寂しい場所に二人っきりでなんか来ないわよ。

ジョン: おれのことをそんなふうに思ってくれて、ありがとよ。おまえの見込み違いじゃないってことは請け合うからよ。(Part 1, 17-18)

という会話を交わしている。タイトル通りのジョンの「正直」ぶりが際立つ場面である。

なお、これもヒッチコックによると、17世紀中ごろから18世紀中ごろにかけてのイングランドは、人口的には停滞ぎみで、初婚年齢の平均も高かった(男性で28歳、女性で27歳)し、私生児の誕生率も結婚時にすでに妊娠している女性の率もきわめて低かった。それが19世紀になると初婚年齢が下がり、私生児の誕生率等が上がる、という変動の時期が18世紀後半のどこかで認められる(25)。したがって、ジョンやケイトも20代後半と設定されているものと見てよいであろうし、二人のあいだに積極的な性的交渉が描かれないのは、ある程度、この物語の存在が初めて確認される17世紀後半の現実と関連性があると考えてもよいかもしれない。

このようなジョンとケイトの行動を、ほかの史料に表れる若者の性行動

ともう少し比較してみよう。『サミュエル・ジョンソン伝』(1791年)で知られるジェイムズ・ボズウェル(1740-95年)の独身のころの日記は、ロンドンに一人で住む中流階級の独身男性の生活の、少なくとも一端を示していると言えるが、ボズウェルは獵官をしたり有名な文筆家との交流を求める一方で、性的にはかなり放埒な暮らしをしていて、愛人や娼婦との情交がしばしばかなり直截に記載されているのが見える。『ジョンとケイト』の第一部の場面は村の居酒屋(ale-house)であるが、二人はここで熱心に結婚してから計画を語り合っている。対照的にボズウェルはロンドンの葡萄酒屋(tavern)をしばしば娼婦との快楽の場として用いている。1763年5月19日の記載にこう見える。

わたしは激しい情欲に燃えてかっかとしながら、ピアッツァをぶらぶらしていた。そこで二人のとてもかわいい女たちに会々と、どこかに連れて行ってくれと頼まれた。「お嬢さんがた。ぼくは文無しの哀れな奴で、お金はあげられないよ。でも、ぼくといっしょにワインでも飲んで楽しく騒いで、それでぼくの言うことを聞いてくれるっていうんだったら、喜んでご一緒するよ。」とわたしは言った。女たちはけらけら笑って、それでいいというので、わたしは「シェイクスピア」亭に[二人を連れて]また戻った。[...]わたしたちは部屋に通され、ほどなくシェリーの瓶が出された。わたしのハーレムともいべきこの女たちをじっくり眺めると、色事にはもってこいの上玉だと分かった。[...]それから、二人を順番に一人ずつ、年齢の順に楽しんだ。[...]わたしは、そうしながら、「私は今、謹厳に冬を過ごしたあとで、ロンドンの葡萄酒屋『シェイクスピアの頭』亭で「高級な」放蕩を楽しんでいるのだ」と考えていた。(263-64)

初期近代の旅籠や居酒屋の特徴を持つ施設は、比較的高級な旅籠(inns)、下層階級の場としての居酒屋(ale-houses)、その中間的な性格の葡萄酒屋(taverns)に分けられたということであり(佐藤清隆 21-22)、ここでジョンやケイトとボズウェルの出入りする場はそれぞれの階層的特質と合致している。どちらも個室で飲食が楽しめるようになっている点では同じであ

り、そのためにプライベートな会話や活動に用いられている、という点でも共通するが、プライバシーが確保された空間で行われている行動の内容は、片や結婚に向けての計画立案であり、片や独身男の性的放縦であり、同じ男女の会話であっても、この二つの場面は、およそ正反対と言ってよいほどに方向が異なっている。

史料に表れるキャノンやボズウェルの例と物語のジョンのどちらが、より一般的な当時(17世紀から18世紀前半にかけて)の若者の性行動を反映しているか、がここでの論点ではない。フィクションである「物語」を取り上げて「現実」の反映を云々するのがここでの狙いではない。問題とされるべきなのは、『ジョンとケイト』が提示する、結婚前の男女の恋愛＝性愛に関する価値観である。この物語の場面をボズウェルの活動と対峙させることによって、民衆の読むものを「卑俗で淫ら」と評した当時の中流階級の見かたは必ずしも当たっていないことがより鮮明に分かる(佐藤和哉「ペニー本」39)。ボズウェルの性的活動を18世紀中葉の独身男性の性行動として一般化するのは危険だし、娼婦を相手にすることは結婚とは別の次元として考える必要があり、つまり、ボズウェルは彼なりの「モラル」に従っていると言えなくもないことを確認したとしても、文人としても後に名前を上げることになるボズウェルと、民衆向け物語の登場人物であるジョンとのどちらが「道徳的」であるかは明らかであろう。なお、ボズウェルについて、一層皮肉であるとも言えるのは、自分がかつて幼いころに「物語集」^{ヒストリーズ}の読者であったと、同じ日記のなかで記録していることである(Boswell 299)。ただし、彼が読んだもののなかに、『ジョンとケイト』が含まれていたかは定かではない。

しかしまた一方で、このような「真面目さ」が、どのような集団の価値観を反映したものであるか、については若干の検討が必要である。先に見たように、このテキストの語りかたからすれば、この物語は単なる「民衆」の物語ではないからである。少なくともその語り手は自らを「民衆」とは別のところに位置づけて、それを見下ろそうとする視点の持ち主であ

る。この語り手が、想定される〈読者＝聴衆^{オーディエンス}〉を教化するところまでを目的としていたかどうかについては、たとえば、18世紀末のハンナ・モアの『廉価版道徳叢書』のような露骨なプロパガンダ色は見られないので、そこまでを意図していたとは考えにくい。しかし、この物語の〈読者＝聴衆^{オーディエンス}〉が民衆であったとしても、このテキストの語り手、あるいはこの冊子を執筆・編集・出版した集団が、いわゆる民衆ではなかったことも考慮すべき点だろう。

スパフォードは、『ジョンとケイト』を含む、結婚や求婚、恋愛に関する^{ヒストリーズ}「物語集」を検討したうえで、「結婚の基盤としてロマンティックな恋愛があるという考えかたが17世紀の貧しい人びとのあいだにも普通にみられたことが、これらの本から分かる」（157）と述べ、18世紀の恋愛小説が「恋愛」という概念を中流階級に広める以前から「政略結婚」ばかりではない「恋愛結婚」が広く存在していたことを主張している。『ジョンとケイト』においても、かなりのスペースが二人の愛情の吐露に費やされていることから分かるように、スパフォードの見解はここでも支持されうるものであるが、恋愛に基づく結婚は、しかし、結婚してからの生活に関する配慮や計画がないことを意味しない。次に、二人の結婚生活に対するヴィジョンを見ることにしよう。

4. 内容の検討(2)——結婚と経済生活——

この物語の相当部分を占めているのは、二人が結婚してからどういう生計の途を立てるかについての相談である。まず、生活の資本ともいえるべき貯金などはどうなっているか。ケイトは、父親の遺産十ポンドが叔父に預けてあり、五ポンドほどの貯金、それに半年分の給金が未払いになっているのが女主人に「貸し」となっている、と言う（Part 1, 7-8）。ジョンのほうは、額を限定していないが、家を出るときに父親にもらった十ポンドに、親方の麦芽製造場で働いた額を足し、またこれまでの給金はすべて未払いなので、それらがまとまった金額の金として入るのが見込まれる。こ

の物語が最初に現れたことが確認される 1685 年の三年後にグレゴリー・キングが作成した人口表によれば、当時 15 万世帯存在したとされる借地農の平均年収は 44 ポンドであるから、二人の資本は、未払いの賃金を別にしても、その六割程度はあったことになる(村岡・川北 57)。

それらの金をもとしてジョンの親方から家と土地を安く譲ってもらい、そこでビールを醸して酒場を開こうというのが、ジョンのアイディアであった。ジョンは、この話し合いをケイトとする前に、本人の言では、「頭が割れそうなくらい、一生懸命考えたり調べたりして、とうとう、『これだ』と思える考えに行きついた」(Part 1, 9) のだそうだ。ひたむきに計画を練るジョンの姿には、周到さよりも真面目さ、ひたむきさが伺える。ただし、ジョンが一人で考えてきた案は、夢がふくらんだものであり、ビールを醸して酒場を開くほか、「二頭くらいは牛を飼えるだけの草地があるし、豚や家禽を飼うゆとりもあるだろうから、おまえは女中を雇って、立派なご婦人のような暮らしができるぜ」(Part 1, 9) と言ってみたりもする。その実現可能性はあまり確かではなく、ここでのジョンの計画にはまだ「夢」としての要素のほうが強いようである。このあたりのジョンの描写にも、語り手の軽いからかいが感じられる。

第一部では、二人の会話はそれから結婚式の手はずのほうに向き、生計の話はとりあえずこのままになる。第二部で、二人が結婚後の生活について話をするとき、二人の計画はより具体的かつ現実的になる。第一部の終わりで、二人は家に帰ってからそれぞれの雇い主に結婚を決めたこと(=独立すること)を報告しあおうと決めたので、それぞれがそれに対して何と言われたかを言う。あらすじを述べた箇所でも触れたように、ジョンが親方に結婚の話をすると、親方は、結婚そのものには賛成し大いに祝福してくれたが、不慣れな商売に手を出すのは危険なので、結婚してから二人で居酒屋をやっていくつもりだというのには反対する。そのかわりに自分が持っている小さな農場をくれて、家畜を飼う金も貸してやるというのである(Part 2, 7-8)。それから、二人はどうやって農場を切り盛りするか、

という話をする。

ジョン：ケイト、おまえには女中を雇ってやるよ。北国育ちで体が
がっちり丈夫な娘をな。辛い仕事に慣れるように育てられた娘にす
るさ。そしたら、農場だけでなく、家の仕事も手伝わせればい
いし、ほかに、たまにはおれと一緒に鋤も使わせよう。[...]

ケイト：あんた、結婚して一家の主になっても、一人で土を耕す気か
い。あんたの親方はそんなこと、しないだろう。

ジョン：おれだって、親方くらい金持ちになれば、しやしないさ。だ
が、若いときには苦労して働くのが知恵ってものだ。そのほうが、
年とってから楽に暮らせるからな。おれは遊んで暮らすより、耕し
ているほうが性にあってるんだ。

ケイト：あたしたち、きつとうまくやれそうだね。牛とかなんとかは
どのくらい飼えるかな。

ジョン：牛ね...、そうだな。鋤につないで使うのにも牛がいるし、そ
のほかには、九頭か十頭分くらいの草地しかないだろう。

ケイト：それだけいれば、乳搾りをしたりバターやチーズを作ったり
で、結構忙しいわ。でも、何かすることがなくっちゃ、時間をもて
あましちまうからね。

ジョン：なあに、仕事はたくさんあるさ。パンを焼いたりビールを醸
したりってのもやってもらわなくちゃならないしな。

(Part 2, 12-13)

ここに見られるのは、それぞれの奉公先を離れ、新しく生活者となる二人
の処世術である。また、ここで「労働」に置かれた強い価値意識を確認し
ておく必要がある。しかし、この本で神に関する言及がほとんど見られな
いことからすると、ピューリタニズムの発露であると言うよりも、むしろ、
「年を取ったときに困らないように」というきわめて現実的な判断にもとづ
いたものだと言ってよいだろう。ただし、ほかの「物語集」^{ヒストリーズ}との関連で一
言述べておくと、この世界の主人公たちの多くは「怠けもの」であり、い
かに楽をして生きるかに腐心するアンチ・ヒーローやトリックスターがし
ばしば見られる。これほど直截に働くことに価値を置く主人公たちは「物^{ヒス}

トリーズ

「物語集」の世界では珍しい(もちろん、ほかにいなくはないが)。だとすると、
「^{ヒストリーズ}物語集」の世界の^{コンヴェンション}ジャンルとしての慣習からの逸脱は、何を意味するのか。この疑問についてはあとで考えることにしてとりあえず、さらに「農場」についての相談を見てみよう。

ジョン: [...]それに、二、三頭のブタを飼おうと思っているんだが、ビールを醸したあとの穀物は、ほかのゴミや何かといっしょに混ぜると、最高のブタの餌になるんだ。これから何かを始めようっていう奴あ、使えるものは何でもつかわなくっちゃな。

ケイト: 足りないものは何一つない、って感じね。すてきな考えだわ。

ほんと、ブタ肉やベーコンはご馳走よね。でも、鳥は飼わないの?

ジョン: そうそう、鳥だとも。こいつらがいなくっちゃ、農場が農場らしく見えないもんな。雄鶏、雌鳥、ガチョウに七面鳥なんてどうだ。卵を生めば市場に持って行って売ればいい。(Part 2, 13)

しかも、ジョンは、卵を売って稼いだ小金の管理をケイトに任せると言う。ケイトはそういうジョンの信用を嬉しく思う。飼える家畜の数、労働の分担、人件費の節約、産業廃棄物の再利用、補助的収入源の確保など、この物語は、あたかも初心者が農場を経営するうえでのノウハウを教える指南書のようにさえ読める。これがどの程度、18 世紀の世紀転換期の農業のようすを正確に表したものであるかを計る農学的データ^{オーデイエンス}を筆者は持ち合わせていないが、ごく常識的な判断として、これは〈読者＝聴衆〉にとってごくなじみ深い世界を描いたものであるから、その点で間違いがあれば、それはよほど奇異なもの、受け入れられないものであったに違いない。これは、少なくとも最初に書かれた時期(おそらくは 17 世紀後半)の経済的判断としては、充分ありうるものであったのだろう。

ここに描かれる「理想の夫婦」像は、経済的な周到さを持ち合わせているばかりでなく、相互間の愛情のうえに成り立ち、対等の関係で協力し合う夫婦でもある。労働についての価値観ばかりでなく、このような夫婦像も、^{ヒストリーズ}「物語集」のほかの物語と比べて例外的である。冒頭でも簡単に触れた

ように、「^{ヒストリーズ}物語集」の^{コンヴェンション}ジャンルとしての慣習としては、『まぬけなサイモン』のような「ダメ夫」ものならば、愚かで気弱な夫と、その夫を打ち据える鬼妻が面白おかしく描かれるのが常であるし、『美しいロザモンド』や『ジェイン・シヨア』などの「歴史もの」では、妻の不倫による夫婦生活の破綻が、『ジャック・ホーナー』などの「滑稽もの」では、不倫をする妻への祝祭的な成敗が描写される。要するに、「貧しいながらも楽しい我が家」が^{ヒストリーズ}「物語集」で描かれることは、この『ジョンとケイト』を除いては皆無に等しいのである。

農業労働者の家庭に関するほかの記述に目を向けると、18世紀の労働慣習についての論文「時間、労働規範と産業資本主義」のなかで、E・P・トムソンは、メアリ・コリアーという女性が書いた農業労働者の妻の嘆きを訴えた詩(1739年出版)を紹介している。

手が十本あったって、全部を使ってしまえるだろう。
子どもは寝かしつけなくてはならないし、
あなたが帰ってきたときには、何でも用意が整ってなくては。
夕食をすませるとあなたはさっさと寝てしまい、
明日の朝まで休んでられる。
ああ、それに比べて私たちはおちおち眠れもしない。
子どもが泣いたり騒いだりするからだ。

ほかの仕事も同じだけやるもので
収穫が始まるときになってから
小麦がすっかり刈られてしまうまで
私たちの苦労ははあんまりにもひどく
夢見る時間さえもない。(Qtd. in Thompson 381)

そもそも初期近代イングランドの農業労働者の家庭を描いた表象がきわめて少ないなかで、このような女性労働者の嘆きと、「ジョンとケイト」のような「お気楽」な夢と、どちらの表象を取り上げるにより意味があるのだろうか。たとえば、ブリジェット・ヒルが編纂した18世紀女性史の

資料集を見ても、社会全体に家父長制が貫徹していたと考えられる社会のなかであって、とくに社会の比較的下層に近いところであって、互いに対する夫婦の愛情に立脚した対等な関係が広く一般的に見られたとは考えにくい(ヒル)。

また一方で、先にも触れたように、この物語は 17 世紀末に初めて確認され、19 世紀初頭まで発行されていたことが確認されるが、この一世紀半ほどの間にイングランドにおける農地のありかたはエンクロージャーによってすっかり異なった様相を呈するようになっていた。18 世紀後半には、資本主義的な農村社会の三分割制(地主—農業経営者—農業労働者、からなる三分割)のなかで借地農は農業経営者となり、大地主に相応の地代を払って農場を経営するようになっていたので、ジョンのような徒弟上がりの若い労働者が、新たに借地農＝農業経営者として競争に参加することはおよそ不可能であつただろうと思われる。物語は変わらないのに、〈読^{オー}者＝聴衆^{ディ・エンス}〉を取り巻く環境は変化し、いつしか物語の世界と齟齬をきたすようになっていったのである。

つまり、『ジョンとケイト』は、その結婚生活へのヴィジョンという点でも、独立して生計を営む新世帯の経済活動という点でも、現実を写しているとは言いがたい。この物語を読んで、当時の徒弟と家事奉公人が結婚して安定した生活を営んでいく見込みが充分にあったことを示す史料であると読むことはできないと考えたほうがよいだろう。さらに言えば、この物語は、出版物として自らがそこに属するはずの「物語集^{ヒストリーズ}」というグループの世界でも例外であり、一般的に「物語集^{ヒストリーズ}」がこうだ、と言えるのとは大きく異なった性格を示している。こうして、恋愛中の二人の行動についても、結婚後の生活や役割分担の点でも、『ジョンとケイト』は現実の反映を主張することもできなければ、ジャンルとしても座りが悪い。それでもなお、この作品が語るものがあるとすれば、何であるのか。最後にこの点について考えてみよう。

5. 結び

まず、一般論として、ある物語が民衆を含む、ある程度の範囲(社会階層の点でも地理的な意味においても)の人びとに読まれていた娯楽作品である場合、そのテキストがわたしたちに語りかけるのは、そういう人びとからなる〈読者＝聴衆^{オーディエンス}〉の持つ価値観を肯定し、支持し、強化することだと考えられる。娯楽作品は、〈読者＝聴衆^{オーディエンス}〉の価値観に挑戦したり、それに対して別の価値観を突きつけたりすることは少ない。しかし、このことはほかの「物語集」についても同様に言えるはずである。繰り返し触れてきたように、『ジョンとケイト』だけがほかの「物語」と異なって、ことさらに「正直さ」「一途さ」を強調するのはなぜか。

ほかの「物語集」^{ヒストリーズ}と比べてときに、ジョンとケイトというキャラクターの最大の特徴は、「等身大」という点にある。「物語集」^{ヒストリーズ}のヒーローやヒロインたちは、多くの場合、遠い過去の歴史上の人物で、しかも騎士や王侯貴族であったり、また、「巨人殺しのジャック」や「トマス・ヒッカスリフト」のように、大部分の〈読者＝聴衆^{オーディエンス}〉と同じような社会的出自であったとしても、悪知恵に富んでいたり格別な贅力を備えていたり、「現実離れ」している。それに対して、ジョンとケイトはきわめて「現実的」なキャラクターだと捉えられたのではないか。ただし急いでつけ加えておくが、ここでいう「現実的」であるということは、ジョンやケイトのような若者が当時どのくらいいたか、ということとは関係がない。〈読者＝聴衆^{オーディエンス}〉にとって、いかにもいそうな人物造形だと思われたのではないか、というだけである。実際の〈読者＝聴衆^{オーディエンス}〉がどのようにそのキャラクターを受けとめていたかを示す史料はないので、このあたりの議論に推測が混じるのはやむを得ないとしても、もしもジョンとケイトのキャラクター造形上の特色をこのように考えてよいのだとすれば、この物語が例外的であるのは比較的容易に説明がつく。二人は、〈読者＝聴衆^{オーディエンス}〉にとって、「あこがれのヒーロー」なのではなくて、「もう一人の自分」なのである。

さらに作品のなかにこの判断の根拠を求めるとすれば、この物語のプ

ロット上の最大の特徴である「事件性の欠如」が挙げられる。通常であれば物語を成り立たせるために必要だと思われる、解決されるべき危機が『ジョンとケイト』には存在しない。第一部の冒頭の痴話げんかもほとんどなく誤解が解けるし、二人の結婚に関して乗り越えるべき障害かと思われた双方の雇用主からの承諾も、すんなり取りつけられて難なくクリアされてしまう。経済的な諸条件も、これまで二人が勤勉な働き手であったために親方やおかみの信用も厚く、きわめて恵まれた条件で(少なくともこの物語が最初に書かれたときの現実との関わりで言えば)新生活をスタートさせることができた。このように解決すべき難題がない物語世界では、主人公たちは超人的力や人並みはずれた悪知恵を持っている必要がない。ただ、日常生活に在る日常的なキャラクターでよい。とくに賢くなくても強くなくてもよい。二人が平々凡々な人物であればあるほど、オーディエンス〈読者＝聴衆〉の共感
は深まるのである。

しかし、キャラクターやプロットと同時に、このテキストが持つ「笑い」の種類に着目してみると、そこに、二人の登場人物とは異なる、テキストの「語り手」が見えてくる。この語り手は、決して二人を突き放したり蔑んだりはしていないし、それどころか、二人に向ける視線はむしろ暖かいとさえ言えるだろう。それでも二人の素朴さや単純さに微笑みを向ける眼差しは、オーディエンス〈読者＝聴衆〉にとっての「等身大」のキャラである二人と同じ高さに立つ視線ではない。ほかの「物語集」ヒストリーズのなかにもそういう作品があるかもしれないが、この物語が「物語集」ヒストリーズのジャンルとしての慣習コンヴェンションから逸脱している理由の一つは、このようなテキストの複層性によるものかもしれない。性的な道徳性も勤勉さや経済的合理性も、オーディエンス〈読者＝聴衆〉がそれを表現している主人公たちのなか
に自分を見る思いをしていたのが確かだとしても、それをオーディエンス〈読者＝聴衆〉に提示してみせた「語り手」は、オーディエンスジョンとケイトを、そして〈読者＝聴衆〉までも見下ろしていたのではないだろうか、と考えられるのではないだろうか。

しかし、たとえそうだとしても、結婚をひかえた若者たちが、身をつつ

しみながらもその日を楽しみに待ち、かつ結婚式の手はずや結婚後の生活について知恵を絞ってやっていこうとする姿は、婚前交渉の率が次第に増え、資本主義化が農村で進んでいく「現実」と強烈なコントラストをなしつつ、〈読者＝聴衆^{オーディエンス}〉が、「あらまほしき」と思う像を提示してみせたのだと言える。親代わりともいべき双方の雇用主からも友人からも祝福されて結婚式をあげ、音楽とダンスの祝宴の果てに眠りにつくジョンとケイトは、初期近代イングランドの民衆が恋愛と結婚と安定した生活に対して抱いていた夢の具現だったのである。

註

1 ^{ヒストリーズ}「物語集」の〈読者＝聴衆^{オーディエンス}〉層をこのように想定すると、性的な含みやスカトロジカルな要素を強く持つジョークの存在など、当時の規範的な児童書には現れような要素が見られることもうまく説明できるかもしれない。この点については、さらに研究が必要だと思われる。

引用文献

- Boswell, James. *Boswell's London Journal, 1762–63*. with an introduction and notes by Frederick A. Pottle. 1950; Edinburgh: Edinburgh UP, 1991.
- Brewer, John. *The Pleasures of the Imagination: English Culture in the Eighteenth Century*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1997.
- British Library. *English Short Title Catalogue, 1473–1800 on CD-ROM*. 1998.
- Canterbury Tales: Compos'd for the Entertainment Of All Ingenious Young Men and Maids, [...]* London: Printed and Sold by William Dickey and Company in Bow Church-Yard, [n.d.].
- Dickey, William and Cluer. *A Catalogue of Maps, Prints, Copy-Books, Drawing-Books, &c. Histories, Old Ballads, Broad-Sheet and other Patters, Garlands, &c.* London: William and Cluer Dickey, 1754.
- Harris, Tim. *Popular Culture in England, c. 1500–1850*. London: Macmillan, 1995.
- ブリジェット・ヒル『女性たちの十八世紀: イギリスの場合』（みすず書房、1990年）
- Hitchcock, Tim. *English Sexualities, 1700–1800*. London: Macmillan, 1997.
- 村岡健次・川北稔編著『イギリス近代史 改訂版』（ミネルヴァ書房、2003年）
- A Pleasant and Delightful Dialogue betwixt Honest John and Loving Kate with the Contrivance of their marriage and Way How to Get a Livelihood. The First Part*. London: Printed by James Hodges, [n. d.].
- Reay, Barry. *Popular Cultures in England 1550–1750*. London and New York:

Longman, 1998.

Sato, Kazuya. 'When Did Robinson Crusoe Become a Children's Book?: an Aspect of a Publishing History in Eighteenth-Century Britain.' *Area and Culture Studies*. vol. 51 (1995), 217-230.

佐藤和哉「18世紀ロンドンにおける印刷出版職人の世界——トマス・ジェントの自伝から」『英米文学研究』第38号(2003年)、17-31ページ。

——。「ペニー本は『不道德』か?: 初期近代イングランドの民衆出版物に見られる性道德」『日本女子大学文学部紀要』第54号(2005年)、39-53ページ。

佐藤清隆「シェイクスピア時代の『酒場』の世界と社会統制——都市の郊外を中心として——」二宮宏之編『結びあうかたち: ソシアビリテ論の射程』(山川出版社、1995年)、21-48ページ。

A Second and most Excellent Dialogue between Honest John, and Loving Kate. Containing not only their Wooing, but also Wedding. London: Printed by and for Edw. Midwinter, [n. d].

Simmons, R. C. ed. *The Dicey and Marshall Catalogue*, London, 1764. <<http://aweb.bham.ac.uk/DiceyandMarshall/reframe.htm>>. 24 October, 2005.

Speck, W. A. *Literature and Society in Eighteenth-Century England: ideology, politics and culture, 1680-1820*. London and New York: Longman, 1998.

Spufford, Margaret. *Small Books and Pleasant Histories: Popular Fiction and its Readership in Seventeenth-Century England*. 1981; Cambridge: Cambridge U.P., 1985.

Thompson, E. P. *Customs in Common*. 1991; Harmondsworth, Penguin Books, 1993.